



アースウォッチ・ジャパン 2010年度 年次報告書

2010年10月1日 ~ 2011年9月30日



1. 2010年度の報告書に寄せて

2010年10月、名古屋で開催された生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)において、遺伝子資源だけでなく、生物資源全般が産業と社会を支える持続可能な資源であり、それを保全・確保すること、そして活用することこそビジネスと生物多様性の重要なテーマになるという愛知ターゲットが採択されました。

アースウォッチ・ジャパンはこの愛知ターゲットに規定された20の重要なテーマに沿って活動を開始致しました。



翌2011年3月に発生した東日本大震災の被災地域への支援として係わっていくべき私共の活動は何か、という議論を経て、当法人は津波による被害をこうむった東北の干潟、水田、島嶼における生態モニタリング調査を進める東北大学大学院と協働してのプロジェクトをスタートさせることといたしました。

2011年の8月、11月の二度にわたる調査には、一般市民、企業の社員が多数参加し、貴重な科学的データの収集に従事しました。この結果は今後、生態系に配慮した復興プログラム作りに役立てられます。2012年にはこの活動も本格的に始動します。多数の皆様のご参加をお願いいたします。

なお、従来から運営されている国内外プロジェクトへの参加ボランティアの数は、震災の年であるにもかかわらず、前年対比で堅調に推移しました。また、翻訳、ホームページ運営、イベント出展など、日常の情報提供や普及啓発活動には多くの会員が自宅において、あるいは事務局を訪ねられて多数協力いただき、多岐にわたる業務を円滑に進めることができました。この紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。

フィールドにおける研究者と一般市民をつなぐアースウォッチ・ジャパンの活動への更なるご支援をお願いし、ご挨拶といたします。

特定非営利活動法人 アースウォッチ・ジャパン
理事長

都留 信也

INDEX

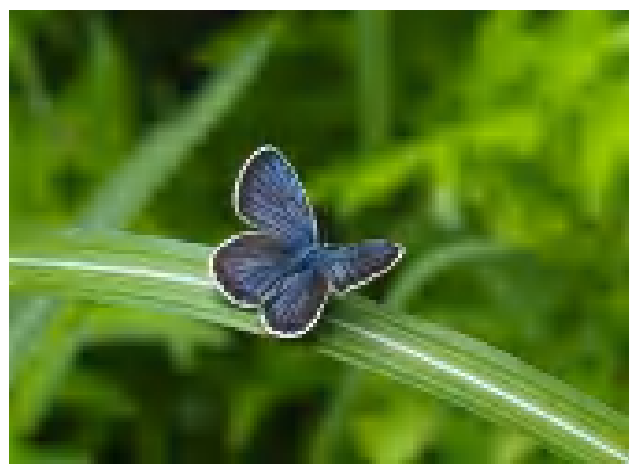
1. 2010年度の報告書に寄せて	01
2. アースウォッチ・ジャパンの活動	03
2-1) 日本国内のプロジェクト	04
2-2) 海外のプロジェクト	15
2-3) イベントの開催	21
2-4) 企業との協働事業	23
3. 事業報告と会計報告	24
4. アースウォッチ・ジャパン中長期計画	27
5. ご支援について	28



2. アースウォッチ・ジャパンの活動

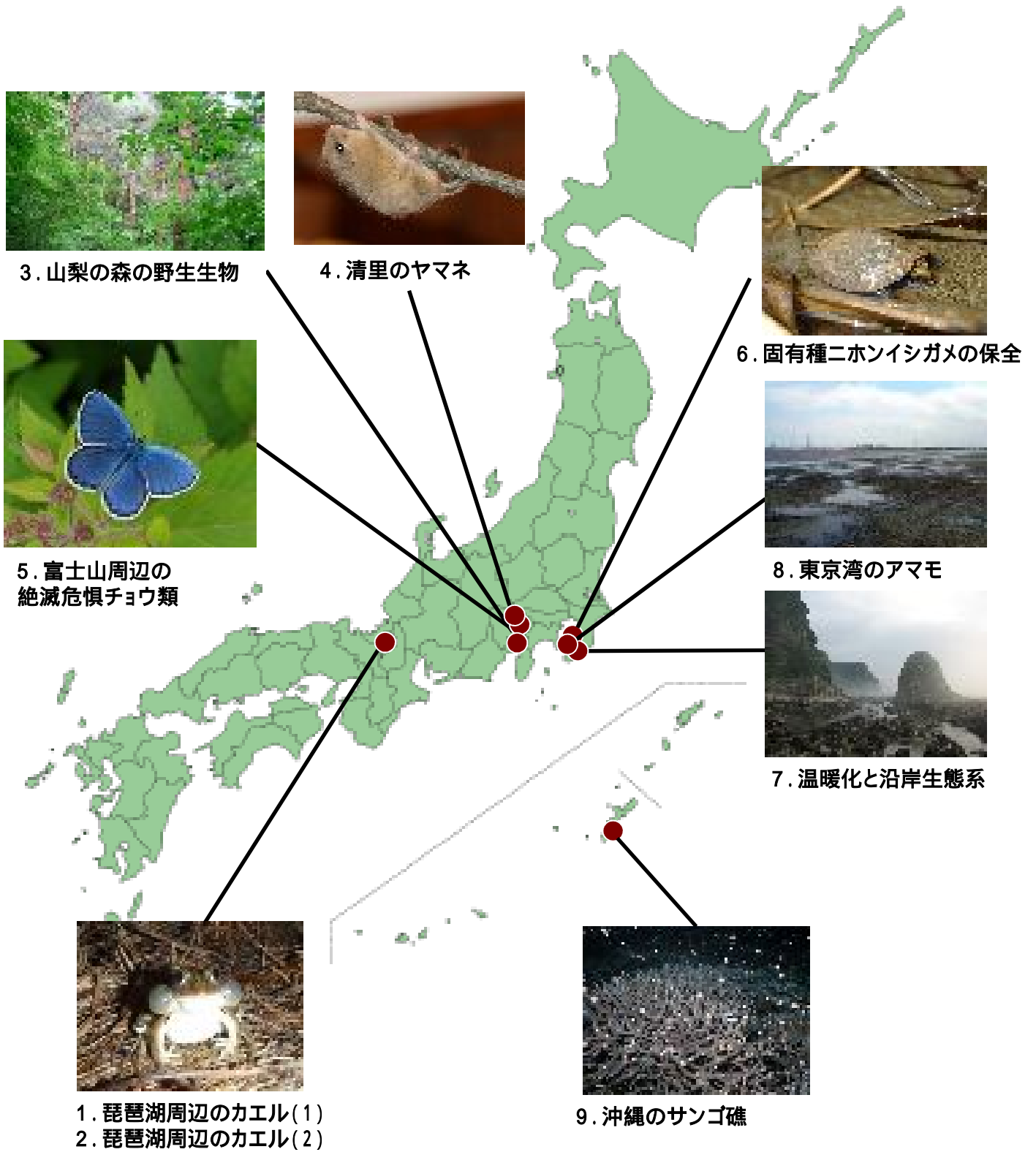
2-1) 日本国内のプロジェクト

日本国内で開催した9つの野外調査プロジェクトをご紹介します。



2-1 日本国内のプロジェクト

国内プロジェクトMap



2-1 日本国内のプロジェクト

国内プロジェクトの実績一覧

NO	プロジェクト名	実施期間	総参加人数	参照ページ
1	琵琶湖周辺の カエル(1)	チーム1: 2011年5月20日(金)～5月22日(日)[2泊3日] チーム2: 2011年6月10日(金)～6月12日(日)[2泊3日] チーム3: 2011年7月15日(金)～7月17日(日)[2泊3日] チーム4: 2011年8月12日(金)～8月14日(日)[2泊3日]	35	6
2	琵琶湖周辺の カエル(2)	チーム1: 2011年5月27日(金)～5月29日(日)[2泊3日] チーム2: 2011年6月17日(金)～6月19日(日)[2泊3日]	7	7
3	山梨の森の 野生生物	チーム1: 2011年5月28日(土)～29日(日)[1泊2日] チーム2: 2011年10月8日(土)～9日(日)[1泊2日]	26	8
4	清里のヤマネ	チーム1:2011年6月10日(金)～12日(日)[2泊3日] チーム2:2011年10月29日(土)～31日(月)[2泊3日]	26	9
5	富士山周辺の 絶滅危惧チョウ類	チーム1: 2011年5月13日(金)～5月15日(日)[2泊3日] チーム2: 2011年6月17日(金)～6月19日(日)[2泊3日] チーム3: 2011年7月22日(金)～7月24日(日)[2泊3日] チーム4:(日立チーム) 2011年8月19日(金)～21日(日)[2泊3日]	29	10
6	固有種ニホンイシ ガメの保全	チーム1: 2012年2月18日(土)～19日(日)[1泊2日] チーム2: 2012年2月25日(土)～26日(日)[1泊2日]	9	11
7	温暖化と 沿岸生態系	2011年10月28日(金)～30日(日)[2泊3日]	6	12
8	東京湾のアマモ	2011年6月4日(土)～5日(日)[1泊2日]	5	13
9	沖縄のサンゴ礁	2011年9月14日(水)～18日(日)[4泊5日]	7	14

* 国内プロジェクトは2011年5月～2012年2月までのものを掲載しています。

2-1 日本国内のプロジェクト

No.1 琵琶湖周辺のカエル(1)

主任研究者	内藤 梨沙 (京都大学大学院 地球環境学舎 景観生態保全論分野 博士課程3年次)
地域	滋賀県高島市新旭町太田
調査日数	2泊3日×4チーム
ご支援	家電エコポイント

調査の概要

人間の働きかけにより維持されてきた里山は、日本ならではの景観であり、多様な生物の生息地でもありました。しかし近年、人手の入らない里の増加や、水田管理の近代化などを受け、里山の環境が大きく変化し、その変化に伴い多くの生物が生息地を失い、現在では里山に生息する生物種が環境省レッドリストの約半分を占めるようになりました。そうした危機的状況にも関わらず、里山に生息する生物種の全体像や、高い生物多様性が保たれてきたメカニズムに関する研究は十分ではありません。本プロジェクトでは、里山の重要な水辺環境である水田に注目し、水田生態系を代表するカエル類の生態に関する調査を行います。本プロジェクトでは本州に生息するカエル類の中で唯一、平成18年度環境省レッドリスト絶滅危惧IB類にあげられているナゴヤダルマガエルを主な研究対象種としています。水田耕作を通じた人間と自然との関わりの中で作り上げられた水田環境を生息地としてきた本種の保全のためには、水田耕作の行われている現場において行う調査が、現実的な保全対策を提案するために必要不可欠です。

ボランティアの役割

田んぼ池・周辺水田においてナゴヤダルマガエルを捕獲します。標識されている個体はその捕獲地点と標識番号を記録し、未標識の個体には標識を付けます。標識を続けることで再捕獲率を高め、個体の移動距離や季節移動、個体数の変動を明らかにしてゆき、田んぼ池・周辺水田においてナゴヤダルマガエル以外のカエル類を捕獲し、捕獲地点や個体情報を記録します。各カエルの生息地、季節の行動範囲の変化、生活史に関する基礎データを蓄積し、水田地帯におけるカエル類の保全の実践的な方法を提案します。さらに、田んぼ池南側にある側溝と両側の畦畔において、カエルを捕獲します。落下個体と畦畔にいる個体に関する情報から、カエル類の生活史を明らかにすると共に、水田地帯の分断化がカエルの個体数に与える影響を考察します。

今年度の成果概要

5月から8月の期間に月に1度プロジェクトを行い、合計33人のボランティアの方々と一緒に調査を行いました。標識再捕獲調査においては、延べ20匹を再捕獲、227匹に新規標識を行いました。ほとんどの再捕獲が田んぼ池であったことから、本種の池に留まる強い傾向が明らかになりました。田んぼ池の中の個体数は約200～300匹の範囲を推移しているようでした。また、周辺の田んぼより大型のメスが多い事もわかりました。あぜ道の植生とカエルの数の関係に関する調査では、ナゴヤダルマガエル880匹、ニホンアマガエル215匹を捕獲、植生の高さ、水温などのデータをとりました。ナゴヤダルマガエルの数は植生の高さとの関係が深い事、両種ともサイズによって数の多さに影響を与えている環境項目が違う事が分かりました。側溝による分断化の影響に関する調査では、落下個体をナゴヤダルマガエル220匹、ニホンアマガエル35匹を捕獲しました。ナゴヤダルマガエルは特に6、7月に落下個体多く、田んぼに水がなくなる時期にあたる事がわかりました。落下個体には特に小型の個体が多く、今後は小型のカエルの運動能力に配慮して、分断化の影響を緩和する必要がある事がわかりました。

2-1 日本国内のプロジェクト

No.2 琵琶湖周辺のカエル(2)

主任研究者	内藤 梨沙 (京都大学大学院 地球環境学舎 景観生態保全論分野 博士課程3年次)
地域	滋賀県高島市新旭町太田
調査日数	2泊3日×2チーム
ご支援	家電エコポイント

調査の概要

多様な生物のすみかとなってきた水田地帯は、圃場整備や農業の近代化などによりその環境は大きく変化し、近年では農家の高齢化などにより耕作放棄や二次林が管理放棄され、水田を含む里地・里山全体の景観も変化しています。こうした状況で、水田を含む里地・里山に生息する生物が平成18年度版 環境省レッドリストにおいて日本の絶滅危惧種の約半数を占めています。しかし、水田地帯に生息する生物種に関する基礎的な情報は少なく、生息している生物種のリスト作りや生活史などの基礎的データの収集が水田地帯の生物の保全のために速急に求められています。

本プロジェクトでは水田環境に生息するカエル類に注目し、その分布と生態を明らかにすることを目的としています。カエル類は水・陸両域を必要とし、環境汚染に敏感な生き物であるため、生息地の消失や環境汚染により世界規模で減少しています。日本においても約3分の1の種がレッドリストに挙げられています。本プロジェクトで新たに蓄積される水田を利用するカエル類の分布や生態に関する基礎データは、日本のカエル類の約半分の種が利用する水田地帯におけるカエル類の保全に役立てられるとともに、水田生態系の生物多様性保全に大きな役割を果たします。

ボランティアの役割

滋賀県草津市と高島市から、土地被覆や地形の異なる水田地帯6ヶ所を選び、夜間にラインセンサス法により実施します。カエルの鳴き声により判別した種、目視により確認したカエルの種、水田の様子等を記録し、各種カエルの分布域や各種カエルの生息環境特性を明らかにします。また、GISを用いて周辺の土地利用がカエルの生息に与える影響についても分析します。

【鳴き声調査】 約100メートルおきに二人ずつのグループに分かれ、約200mごとに3分間立ち止まり、カエルの鳴き声から種を判別し、その種と鳴き声の程度(少数単独、複数断続、複数重複、多数連続)を記録します。

【環境調査】 観測地点の畦畔の草管理状態(草丈、被度)、水深を記録。移動中は目視により確認したカエルの種、水田の管理状態(水田耕作を行っている、休耕田、畑等)を記録します。

今年度の成果概要

カエルの繁殖期にあたる5月、6月に月に1度、プロジェクトを行い、合計7人のボランティアの方々と調査をおこないました。調査地点は湖西地域と湖東地域から3ヶ所ずつ選定しました。調査の結果、ニホンアマガエル、ナゴヤダルマガエル、ウシガエル、シュレーゲルアオガエル、トノサマガエル、ツチガエルが確認されました。調査地点(計60地点)によって確認されたカエル相、畦畔の草管理状態などの環境要因は異なっていました。ニホンアマガエルはどの地点においても多数が連続して鳴いている様子が確認され、環境をあまり選ばずに生息する事がわかりました。ナゴヤダルマガエルは多数が鳴いている様子が湖西地域で多く確認され、湖からの距離が近く土が1年を通して湿っているような環境に多い事が推測されました。ウシガエルは全ての地点で少数が単独で鳴いている様子が確認され、田んぼの周囲に深い水路がある地域に多い事がわかりました。シュレーゲルアオガエルは、少数が鳴いている様子が確認され、山間地域にある田んぼに多く生息する事がわかりました。トノサマガエル、ツチガエルは少数が確認されましたが、数は全体的に少なく、両種は田んぼの一般種として知られていますが、田んぼ環境の変化に伴って数が減っている可能性が示唆されました。

2-1 日本国内のプロジェクト

No.3 山梨の森の野生生物

主任研究者	須田 知樹 (立正大学地球環境科学部 環境システム学科准教授)
地域	山梨県山梨市水口地区「ライオンの森」(山梨市企業の森内)
調査日数	1泊2日×2チーム
ご支援	ライオン株式会社

調査の概要

戦後の木材需要の増加に伴い、日本では人工林を飛躍的に増加させる拡大増林政策を行い、天然林を人工林に置き換える動きが全国で見られました。しかし、その後安価な輸入材の流入や林業の担い手不足により林業は長い低迷傾向に入り、その結果、森林の手入れが行き届かなくなっている現状にあります。では、日本の森はどのくらい荒れ、森に生息する生き物やその多様性は、どうなっているのでしょうか？

このプロジェクトでは典型的な日本の森林をフィールドに、継続して生物の生息状況を調べることで、日本の森林の生物多様性の現状を把握し、今後の森林管理計画に向けた対策を模索していきます。一方、環境にかかわる市民・企業・研究者の活動では、生物多様性そのものの概念にまで踏み込む例は非常に少ないのが現状です。そこで、アースウォッチ・ジャパンでは山梨県山梨市に企業の森を所有するライオン株式会社と協働し、「ライオン山梨の森」をフィールドに、ライオン株式会社による森林の維持、同社社員やアースウォッチ・ジャパンのボランティアによる長期継続的生物情報の蓄積、その情報を用いた研究者による分析研究という、三者による役割分担と協働体制を構築することを目指しています。それにより、企業・市民・研究者による生物多様性保全活動における新しい協働の形を日本国内に広めていきます。

ボランティアの役割

ライオン山梨の森を100m×100mのメッシュに区切り、メッシュ内の生物の痕跡を探していきます。調査は、研究者の指導のもと、ボランティアが横一列に並んで歩きながら、シカの食痕やクマの爪跡、イノシシの掘りおこし跡、糞、足跡などを探します。痕跡を見つけたら、GPSを使って位置情報を調べ、調査票に記録していきます。

痕跡調査とともに、樹種の調査も行い、森林目録を作成し、森林と生物の関係性を調べます。

正方形コドラート内の全ての樹種を調べて太さを測定し、GPSで位置をおとし、ラベルテープに番号を貼ります。同時に木の周りの動物の痕跡も探し、見つけたら情報を記録します。

今年度の成果概要

2011年度は5月下旬、10月中旬に、それぞれ1泊2日(1日目正午集合、2日目正午解散)、正味調査時間8h/回を計2回行いました。5月調査では2日目に雨天のため調査が中止となりましたが、その他の予定は順調に消化し、総面積1.5haの毎木調査を行う事ができました。参加者は、研究者、アシスタント(2名×2)、EWボランティア(6名)、ライオン社社員(6名)で、用いた機材はインパルス社製マップスターモジュール(レーザー測量機器)です。10月調査には、5月調査参加者も数名おり、機材使用に習熟した方もいたこともあり、また天候にも恵まれ、非常に円滑に調査を行う事ができました。また、5月調査時には、毎木調査を行いながら、適宜痕跡調査を行う計画を立てていましたが、同時作業は困難であったため、10月調査では毎木調査班と痕跡調査班の2班に分かれ、1日目と2日目で役割を交代する体勢をとりました。交代の際に機材の取扱など、若干の戸惑いもあったようですが、皆すぐ慣れ、この体勢で調査を進める方が効率的かつ効果的と判断できました。

2-1 日本国内のプロジェクト

No.4 清里のヤマネ

主任研究者	湊 秋作 博士 (ニホンヤマネ保護研究グループ代表、 財団法人キープ協会やまねミュージアム館長、関西学院大学教授)
地域	山梨県北杜市八ヶ岳南麓の清里高原
調査日数	2泊3日×2チーム

調査の概要

ヤマネ科はネズミなどと同じ齧歯(げっし)類で、世界中で「ネボスケ」と言われています。最近の遺伝学的研究から、ニホンヤマネ(以下、ヤマネ)は日本列島に太古の昔から住んでいる最古参の哺乳動物の一種で、日本への固有度が高い生きた化石であることがわかってきました。そうした重要性が明らかになってきたにも関わらず、今の日本では、ヤマネや森の動物にとって必要な自然林が減少してきています。生きた化石とはいえ、森を失くしては生きていくことはできません。土地開発や道路建設による生息地の減少と分断により、その数は減少しつつあるといわれています。特にヤマネは、レッドデータの準絶滅危惧種に指定されており、特別な保護の必要な動物であるにも関わらず、その生物学的知見は少なく、野生ヤマネの生態はまだ多くの謎に包まれています。ヤマネの保護を通して、森林保全の具体策を提示し、さらに人々に自然の大切さと保護の重要性を伝え、自然と人間との共存の方法を調査を通じて考えていきます。

ボランティアの役割

【巣箱・杭の作成とリニューアル】

木で作った巣箱や杭は時間が経つごとに徐々に傷んでいくので巣箱と杭の作製・補充やメンテナンスを行います。巣箱は、調査地に40m毎に架けられており、赤茶色のペンキを塗った、ヒノキ・スギの板を切って組み立てます。杭は、調査地に碁盤目状(20m毎)に打っており、ヤマネの活動範囲、夜間行動の軌跡、樹木の位置を正確に把握するために重要な標識です。杭は約1400本程度が設置されているので、古い杭を撤去し、新しいものに打ち替えます。

【巣箱調査】

調査地に設置した300個以上の巣箱を調べ、ヤマネの痕跡(糞、樹皮、コケなどの巣材、体毛など)があるかどうか、また、ヤマネが実際に休んでいるかどうかを調べます。巣箱調査で見つけたヤマネは体重の計測、雌雄の判別、耳にマーキングがあるかどうかを調べ、その後リリースします。マーキングのない新しいヤマネには発見者が命名できる楽しみがあります。ヤマネの生態及び作業内容の詳細については、作業の前に説明があります。

今年度の成果概要

2011年度は6月と10月の2回開催しました。6月の回には、10名にご参加いただき、調査地の杭の交換をと巣箱調査をしました。杭打ちでは、200本以上の杭の交換を行うことができました。また、並行して行った巣箱調査は約200個近く森に仕掛けられているもの全てのチェックが終了し、その中で2頭のヤマネを発見することができました。10月の回には12名のボランティアの参加を得て、6月に行った場所よりもアップダウンのある森で作業を行いました。作業としては、杭打ちの作業と巣箱のチェック、そして研究に使用する腐葉土を森から集めて大きなケージに敷き詰める作業を中心に行いました。杭は273本の交換を行うことができました。3日目は、巣箱調査も同時並行をして行ない、研究用の腐葉土も実験に十分使用できるだけ収集でき、研究を行う上での大きな助けとなりました。更に、古い巣箱の解体も行い、古い巣箱がきちんと役目を終える形にさせていただきました。

2-1 日本国内のプロジェクト

No.5 富士山周辺の絶滅危惧チョウ類

主任研究者	渡邊 通人(河口湖フィールドセンター 館長・自然共生研究室長)
地域	富士山北麓三草原(山梨県; 梨ヶ原・本栖高原・野尻草原)及び 富士川河川敷(身延・甲府)
調査日数	2泊3日×4チーム
ご支援	花王株式会社(チーム1~3)・株式会社日立製作所(チーム4)

調査の概要

里山的自然は原生的な自然とは異なる独自の生態系から成り、日本列島の生物多様性を豊かなものにしてきました。そのひとつに採草地としての草原環境があります。しかし、今では生活様式や産業構造の変化に伴い、家畜の餌として、また加工製品の材料としての草類の利用はほとんどなくなり、採草地を維持することが困難となっています。さらに、開発、あるいは火入れや草刈りなどの人手が入らなくなったことで森林へと遷移が進み、草原は急速に減少しつつあります。今では、これら里山的環境の一部である草原を維持していくことは、富士山周辺の生物多様性の保全のための喫緊の課題となっています。

草原環境保全のKey-speciesとしての絶滅危惧草原性のチョウ類の生態を調べることは、絶滅に瀕している原因を追求することになり、同時にその種を育てている草原環境全体の推移を見守ることにもなり、この貴重な草原環境の保全策策定のための基礎調査として位置づけられます。

ボランティアの役割

富士山北麓三草原(梨ヶ原・本栖高原・野尻草原)の特性把握と、その保全のための基礎調査として、4~10月に原則として月2回行っているチョウ類全種を対象としたセンサス調査の一部を、捕獲や写真撮影・記録などで手伝います。また、ミヤマシジミ・アサマシジミ・ヒョウモンチョウをKey-speciesとして、成虫や幼虫にマーキングすることによって個体数の年変動、季節変動、行動範囲などのチョウ類の保護のための基本情報を集めます。

【幼虫】食餌植物の分布と幼虫の食痕や共生アリ類を探索し、GPS機器を利用して記録します。

【成虫】捕虫網で捕獲した後、マーキングして放します。その際、番号・雌雄・汚損度・GPS情報・行動等を記録し、マーク付の個体を見つけたら写真撮影後記録します。

【食餌植物分布調査】絶滅危惧種の保全のためには、その幼虫が食べる植物(食草・食樹)がどこに分布し、それをどのように利用しているかを調べるのが重要な基礎データとなります。そこで、チョウの食樹や食草の分布調査も行います。

今年度の成果概要

5月4名、6月7名、7月8名、8月10名のボランティアが参加下さり、下表の様な成果を得られました。絶滅危惧ミヤマシジミ・アサマシジミ・ヒョウモンチョウを含め()内の種数の絶滅危惧種の記録が得られ、快晴だった5・7月はもちろん、ほとんど曇りや小雨だった6・8月にも大きな成果が上がりました。

2011年アースウォッチ・プロジェクト調査結果概要

	身延	御坂	本栖高原		野尻草原		梨ヶ原
	ミヤマシジミ	アサマシジミ	種	頭	種	頭	ミヤマシジミ
5月	幼虫9頭	幼虫35頭	11	20	4(1)	18	幼虫4頭
6月	幼虫28頭	-	6(2)	51	ヒョウモンチョウ	2頭再捕獲	成虫13頭
7月	幼虫78頭・成虫6頭	-	27(4)	179	18(3)	110	幼虫312頭・成虫4頭
8月	幼生93頭	-	-	-	-	-	成虫約60頭

2-1 日本国内のプロジェクト

No.6 固有種ニホンイシガメの保全

主任研究者	小菅 康弘(NPO法人カメネットワークジャパン / 代表理事) 小林 頼太(新潟大学 研究推進機構 超域学術院 朱鷺・自然再生学研究センター 特任助教 博士(農学)) 鈴木 大(東京海洋大学 海洋科学部 博士研究員 博士(理学))
地域	千葉県君津市
調査日数	1泊2日×2チーム
ご支援	公益財団法人大阪コミュニティ財団「東洋ゴムグループ環境保全基金」

調査の概要

この調査地では、固有種であるニホンイシガメとクサガメが同所的に生息しています。本プロジェクトの主任研究者は、1997～2002年まで継続した調査を実施し、生息するカメの個体数を推定、また季節的に河川の分布に変化が見られることを確認しました。

調査地では、河川に新しい橋を渡すため河床を一部掘削し護岸された他に、水田を分割するように道路の建設が始まりました。これらの人為的な環境の改変が、淡水性カメ類にどういった影響を与えるのか、その影響を明らかにすることを目的とします。また、昨今、人的な環境の改変や外来種の侵入による影響で、淡水性カメ類は個体数が減っていると指摘されていますが、過去の生息数に関する知見は乏しい状況です。現在、哺乳類による捕食の増加により、ニホンイシガメとクサガメの生息数に重大な影響が出てきているため、この状況の追跡調査も行います。これらの調査は、人為的な環境の改変がカメへ与える影響を示すデータが乏しいので、今後のカメならびに水田や河川周辺部を利用する生物の生息環境を保全するための基礎資料のひとつとなります。

ボランティアの役割

推定個体数、種構成、雌雄比、体サイズ構成とを比較するデータを収集します。冬の調査では河川を歩き、川底の横穴や淵で休眠しているカメを手探りでみつけ、捕獲します。その後測定、捕獲場所の記録などを行います。調査結果は、今後のカメならびに水田や河川周辺部を利用する生物の生息環境を保全するための基礎資料となります。

【カメの捕獲】 河川に胴長靴で入り、河床の横穴や淵に手を突っ込んで、手の感覚を頼りにカメを捕獲します。

【カメの計測】 捕獲したカメのからだの部位(背甲長・腹甲長・背甲幅長・体重等)を計測します。

【計測データの記録】 種・性別・からだの部位の測定値等を記録します。

今年度の成果概要

1泊2日×2回の計4日間で計10名のボランティアが参加しました。第1日目は積雪明け、3日目は寒い雨と厳しい条件の中、根気強くカメの捕獲作業を行い、無事に全調査範囲を終えることができました。カメは合計で約180個体ほど捕獲することができ、今回も精度の高い調査ができたことが、まず成果として挙げられます。

2008年には、哺乳類と考えられる動物の捕食により、生存していたカメは99個体、死亡していたカメは105個体で死亡数が生存数を上回る異常な事態が発生しました。今年度においては、死亡していたカメは1個体のみが発見であったことから、その異常な事態は本調査範囲においては回避されたと評価できる結果が得られました。

また、ニホンイシガメの全体に占める個体数の割合が例年2割程度でしたが、今回は1割程度でした。ニホンイシガメが本調査範囲以外で越冬していることが考えられることから、今回の結果だけでは減少しているという評価をすることは難しいですが、今後調査を進めるにあたり留意すべきことと認識しました。最近の遺伝子解析などによる研究によって、クサガメの外来起源が支持されつつあるため、再度ニホンイシガメの保全について考慮するきっかけを得た調査となりました。

2-1 日本国内のプロジェクト

No.7 温暖化と沿岸生態系

主任研究者	仲岡 雅裕 (北海道大学 北方生物圏フィールド科学センター 厚岸臨海実験所 教授)
地域	千葉県 鴨川市～館山市にかけての岩礁海岸
調査日数	2泊3日×1チーム
ご支援	香港上海銀行

調査の概要

温帯域の沿岸に見られる海草藻場(アマモ場)や岩礁潮間帯(磯)は、熱帯のサンゴ礁やマングローブなどと同様に、生産性が高く、さまざまな動植物の生息の場所として、沿岸環境で重要な役割を担っていると考えられます。しかし沿岸における人間の経済活動の拡大に伴い、その分布面積の減少や機能の劣化が心配されています。

私たちは、この重要な沿岸生態系を保全するために、生物群集の構成や変動様式と、さまざまな環境要因との関係を明らかにするための、広域・長期的な研究に取り組みます。海洋生態系は陸上生態系よりはるかに多様な生物が観察されます。これらの生物間のつながり、および環境要因との関連性を明らかにしていくことにより、生物の多様性が非常に複雑な相互関係で成り立っていることが理解できると思います。さらに、近年進行する地球温暖化に代表されるような環境変動が、沿岸生物群集の変化を通じて沿岸生態系にどのような変化を与えるかについて予測することにより、今後の人間活動を含めた野外生態系のあり方を考える機会になればと願っています。

ボランティアの役割

日本列島太平洋沿岸に設置した調査地(合計150調査区)で、磯に生息する海藻類やフジツボ、イガイなどの固着動物群集、巻貝などの移動性動物群集の長期的な変化を追跡します。磯調査では、主に以下の2つの調査に関連した作業を行います。

【生物調査】 生物の分布を記録します。ボランティアは、海藻類やそのほかの生物の種名と被度・密度を記録します。ボランティアは研究者とペアを組んで、研究者が読み上げる種名を記録する作業を手伝います。また、デジタルカメラによる撮影記録も手伝います。

【環境調査】 水温、気温、岩温、波の高さなど沿岸の基本的な環境条件に関して現地での実測を行います。なお、野外調査終了後に研究拠点となる臨海実験施設でデータのコンピュータへの入力、デジタルカメラ画像の整理なども手伝います。

今年度の成果概要

本年度は、7月29日～31日、10月28日～30日の2回にわたり合計6名のボランティアの参加の元、岩礁潮間帯の調査を実施しました。なお、当初予定されていた1回目(4月)の調査は東日本大震災に伴う諸事情のため、中止となりました。本年度も2008年度以降続けている永久調査区の固着性生物および移動性動物の被度・密度・種構成の測定、写真撮影、波の高さと温度の計測を引き続き継続調査し、5海岸合計25点の調査センサスにおける群集構成の長期変動を解析するための基礎データが得られました。また、今年度の調査の結果、房総半島では地震および津波に伴う沿岸生物群集の大きな変化はないことが明らかになり、これは同じ方法で調査を続けている三陸沿岸のデータとは異なっていました。今後この2か所を比較することにより、地球温暖化の影響の評価のみならず、地震・津波に伴う大規模攪乱が沿岸生態系に与える影響に関する知見についても得られることが期待されます。

2-1 日本国内のプロジェクト

No.8 東京湾のアマモ

主任研究者	仲岡 雅裕 (北海道大学 北方生物圏フィールド科学センター 厚岸臨海実験所 教授)
地域	千葉県 富津市
調査日数	1泊2日×1チーム
ご支援	香港上海銀行

調査の概要

温帯域の沿岸に見られる海草藻場(アマモ場)や岩礁潮間帯(磯)は、熱帯のサンゴ礁やマングローブなどと同様に、生産性が高く、さまざまな動植物の生息の場所として、沿岸環境で重要な役割を担っていると考えられます。しかし沿岸における人間の経済活動の拡大に伴い、その分布面積の減少や機能の劣化が心配されています。

私たちは、この重要な沿岸生態系を保全するために、生物群集の構成や変動様式と、さまざまな環境要因との関係を明らかにするための、広域・長期的な研究に取り組みます。海洋生態系は陸上生態系よりはるかに多様な生物が観察されます。これらの生物間のつながり、および環境要因との関連性を明らかにしていくことにより、生物の多様性が非常に複雑な相互関係で成り立っていることが理解できると思います。さらに、近年進行する地球温暖化に代表されるような環境変動が、沿岸生物群集の変化を通じて沿岸生態系にどのような変化を与えるかについて予測することにより、今後の人間活動を含めた野外生態系のあり方を考える機会になればと願っています。

ボランティアの役割

アマモは海に生える種子植物で、「海草(うみくさ)」と呼ばれ、コンブやワカメなどの「海藻」に比べ、陸上植物に近い仲間です。陸上に進出した後、海に還っていった点で、クジラやイルカと同様の進化の歴史を持っています。アマモが生える海草藻場は多様な生物の生息場所となる事から、沿岸生態系の中でも重要な機能を果たしていると考えられています。アマモ調査では、こうしたアマモ類の量や分布、生産性、アマモ場に生息する生物の種の多様性と現存量、そしてアマモ場の水質・底質の環境条件の定量的な調査を行っています。収集したデータにより、環境要因、アマモ類や動物群集の生物多様性やアマモ場の生態系機能の3つの関連性について、統計解析により解明していきます。

【アマモ被度調査(植生マッピング)】 東京湾富津干潟に設けた調査区(100m×50m)において、出現する海草類(アマモ、コアマモ)および二枚貝類(ムラサキガイ)の空間分布を測定します。

今年度の成果概要

本年度は、6月4日～5日にボランティア5名、研究者7名の参加のもと、東京湾富津干潟沖アマモ場で調査が行われました。初日はアマモ場の海草類の種構成および植被率を例年と同じ方法で、200m×50mの調査区内で調べ、合計10,000のデータを得ました。2日目は、初日にマッピングしたデータを空間的に外挿するための手段として、カイトフォトグラフを利用した空中写真の撮影を行いました。これらの異なるタイプのデータを統合することにより、アマモ場の分布および生態系機能の長期変動のパターンとその要因について、今後解析を続ける予定です。また、今年度の調査の結果、東京湾では地震および津波に伴う沿岸生物群集の大きな変化はないことが明らかになり、津波の激甚な被害を受けた三陸沿岸のデータとは異なっていました。今後この2か所を比較することにより、地球温暖化の影響の評価のみならず、津波に伴う大規模攪乱が沿岸生態系に与える影響に関する知見についても得られることが期待されます。

2-1 日本国内のプロジェクト

No.9 沖縄のサンゴ礁

主任研究者	鈴木 款 教授(静岡大学 創造科学技術大学院 創造科学技術研究部 静岡研究院長)
地域	琉球大学 熱帯生物圏研究センター 瀬底実験所 (沖縄県国頭郡本部町)
調査日数	4泊5日×2チーム
ご支援	三菱商事株式会社

調査の概要

近年カリブ海およびオーストラリアのグレートバリアリーフから相次いで海水温の上昇によるサンゴの白化現象が報告されています。にもかかわらず、サンゴの白化現象の状況は1998年の大規模な白化現象と同程度の状況にはまだ至っていません。ここからもサンゴの白化現象は海水温の上昇だけでなく、サンゴ礁の栄養循環、海流、有機物循環、あるいは微生物の働き等が関係していると考えられ、サンゴの白化現象の科学的解明とその対策を明確にするためにはサンゴ礁全体の生命維持機構を知る必要があることが分かります。2011年度は、昨年に引き続き、琉球大学の熱帯生物圏研究センター瀬底実験所を中心に、こうしたサンゴの白化の機構解明とその主要因子等の解明の研究調査(1)サンゴの飼育槽の実験、(2)フィールドでのシアノバクテリアの影響調査、(3)サンゴ礁の地形・生物分布図の作成、以上の3つの課題を3チームに分かれて行います。作業は、試料採取、採取のための瓶やラベルの準備、実験装置の設置と準備、試料採種後の試料処理、データの整理、後片付けなどです。実験は時には早朝、あるいは夜中まで行われます。

ボランティアの役割

プロジェクト中は、作業内容ごとに小グループに分かれて調査を手伝います。フィールドでの調査と実験所での作業の比率は半々です。

【沖縄本島北部の瀬底島周辺のサンゴ礁のフィールド調査】 フィールド調査ではサンゴだけでなく、海水と堆積物中の微生物に関する調査、フィールドの化学成分の分布に関する調査、フィールドの海流の調査などを中心に行います。場所による変化(空間分布)と時間による変化(時間分布)について調査します。

【瀬底実験所での実験】 瀬底実験所では、化学分析、生物調査を行います。環境因子(水温、光量、栄養塩濃度等)の変動に伴うサンゴの応答とサンゴに共存している微生物生態系の調査について室内実験を行います。

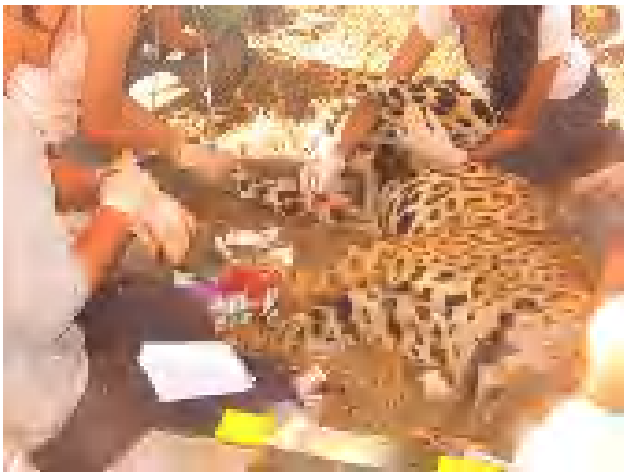
今年度の成果概要

①白化の原因となる微生物の同定もDNA解析によりできました。サンゴにダメージを与えるプロテアーゼの影響評価もできました、サンゴ内部の褐虫藻、微生物、栄養塩、有機物などを観察、測定、解析できる方法を確立できました。④サンゴは自給自足の世界を自らの体内で循環させていることも明らかにしました。⑤サンゴ礁は、従来報告されているより、高い有機物生産をしている場であること、だから多様な生物群集が生息できることを明らかにできました。⑥サンゴ礁がオアシスである理由は、サンゴ体内、砂地、サンゴの瓦礫、シアノバクテリアの窒素固定等により豊富な栄養塩が、周りに海水に比べて豊富にあることを明らかにしました。ボランティアの協力で、サンゴの白化の本当の原因はサンゴ体内での褐虫藻の喪失・死滅であること、サンゴの外に排出されるのはサンゴ内の細胞数の0.1%程度であることを明らかにできました。またサンゴ礁の健全性の指標や、なぜサンゴ礁に豊かな生物生産があるのかの理由も分かりました。

2-2 海外のプロジェクト

2-2)海外のプロジェクト

世界各地で開催した野外調査プロジェクトをご紹介します。



2-2 海外のプロジェクト

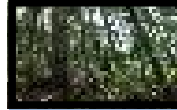
海外プロジェクトMap



6. ボルネオの雨林と気候変動
気候変動がボルネオの熱帯雨林に与える影響を評価し今後の森林回復計画に役立てる調査



2. モンゴルの大草原の野生生物
絶滅に瀕している野生ヒツジの個体数減少を食い止めるための行動と生態の調査



3. 中国浙江省の森林と気候変動
中国東部の高温多湿の浙江省で行われる重要な気候変動の調査



47. ボルドーのワインと野生生物
フランスのブドウ農園で農場主たちが生物多様性を強化するのを支援する調査



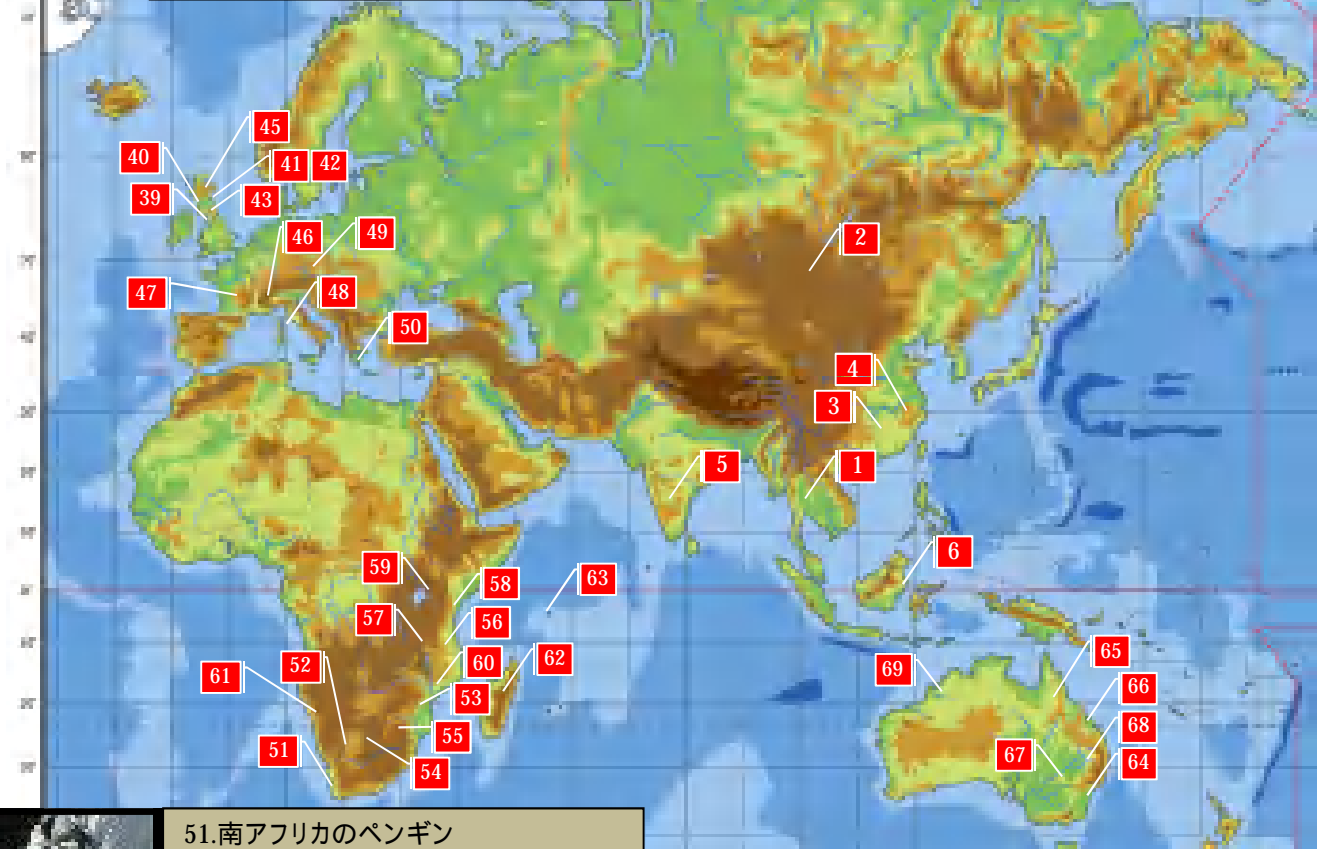
40. ヘブリディーズ諸島のクジラとイルカ
スコットランドに浮かぶヘブリディーズ諸島海域に生息する鯨類の個体数調査



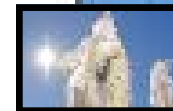
50. ギリシャのバンドウイルカ
ギリシャのバンドウイルカの生態を解明し、保護を推進するのを助ける追跡調査



48. 古代ローマ帝国時代の海岸都市の発掘
トスカーナ地方沿岸でティレニア海を見渡す文化遺産の発掘と保全に協力する調査



51. 南アフリカのペンギン
アフリカペンギンのコロニーがある世界遺産登録地域で生物多様性の保護に協力する調査



52. カラハリ砂漠のミーアキャット
ミーアキャットの集団生息地で、その生態を把握するために行う調査



54. 南アフリカのカッシュクハイエナ
多くの野生生物が生息する地域や非保護区域にいるカッシュクハイエナの状況を改善する調査



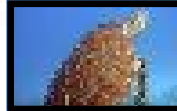
59. ケニアのクロサイ
絶滅の縁からクロサイを救うために行う調査



64. オーストラリアの消え行くカエル
オーストラリア東部の雨林に生息する、絶滅の危機に瀕しているカエルの状況を評価する調査



66. マンタの海
マンタの貴重なデータを収集し、生息環境の長期モニタリングのための基盤作りをする調査



68. 危機にあるカメ
絶滅危機にあるウミガメの種に致命的な影響を与える、海洋汚染の調査

2-2 海外のプロジェクト



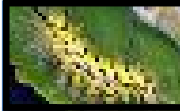
7.マンモスの墓場
マンモスの墓場の中で氷河期の生活の細部を把握するために発掘調査



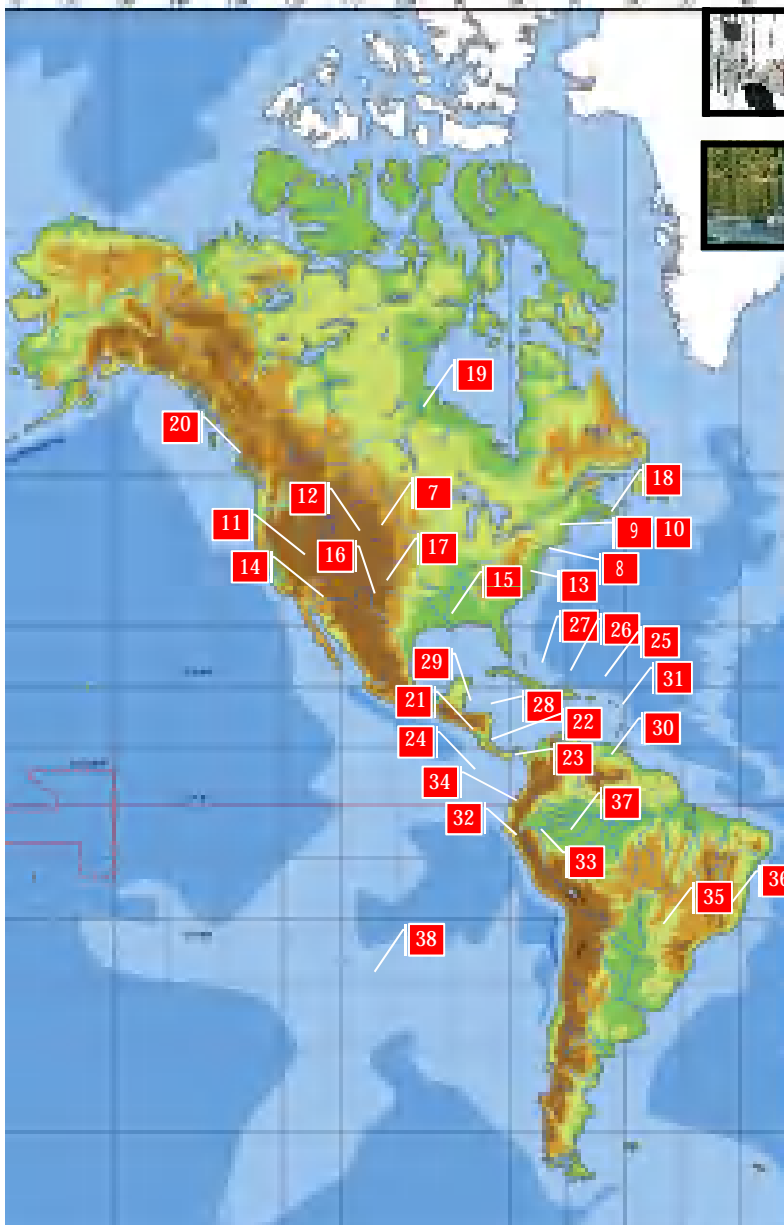
8.バーネガット湾のキスイガメ
アメリカ東海岸では最大級の塩性湿地生態系で行う、この地域の象徴的存在であるカメの調査



12.ロッキー山脈の鳴禽類
渡りをするものとしないもの双方を含めた鳴禽類を調査し個体数減少の原因を探る調査



14.森のイモムシ
自然現象にイモムシとその寄生者がどのように対応しているかを知る調査



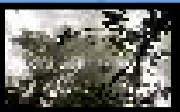
19.北極圏周辺の気候変動
北極圏の温室効果ガスの監視と、地球温暖化に対する生態系の反応をモニターする調査



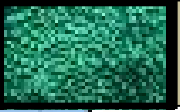
20.コククジラの回遊
コククジラが北太平洋とバハ・カリフォルニアの間を毎年29000キロも旅する謎を解き明かす調査

地図に示されている番号は、次ページにプロジェクト名がございますのでご覧下さい。

地図の周りに例示してあるプロジェクトは、2010年度に日本からボランティアが参加したものです。



34.エクアドルの森林と野生生物
保護区の管理者が生息地と生物の保全計画を立案するのに協力する調査



29.ベリーズのサンゴ礁生態系の復元
ベリーズ沖の澄んだ海中で魚とサンゴのモニターに協力し、海洋保護区の管理を改善する調査



35.ブラジルの野生動物とその回廊
アラグアイ川の動物たちの保護方法を作り上げようとしている科学者に協力する



32.森のイモムシ
自然現象にイモムシとその寄生者がどのように対応しているかを知る調査

2-2 海外のプロジェクト

海外プロジェクトの実績一覧

日本の参加人数: 本年度参加人数
 累計: アースウォッチ・ジャパンからの総派遣人数

NO	プロジェクト名	エリア	日本の参加人数	累計
1	アンコール王朝の起源	タイ	0	6
2	モンゴルの大草原の野生生物	モンゴル	2	9
3	中国浙江省の森林と気候変動	中国	2	2
4	広州黄村の生態系マッピング	中国	0	0
5	インドの西ガーツ山脈の森林と気候変動	インド	0	0
6	ボルネオの雨林と気候変動	マレーシア	3	7
7	マンモスの墓場	米・サウスダコタ	2	2
8	バーネガット湾のキスイガメ	米・ペンシルバニア	3	10
9	ニューヨーク市の野生生物	米・ニューヨーク	0	6
10	ニューヨーク市の野生生物(舞台裏)	米・ニューヨーク	0	0
11	森のイモムシ	米・ネバダ	0	0
12	ロッキー山脈の鳴禽類	米・ワイオミング	1	4
13	チェサピーク湾の森の気候変動	米・メリーランド	0	0
14	森のイモムシ	米・AZ, LA	2	11
15	アメリカ南西部の地理	米・ニューメキシコ	0	0
16	リオ・グランデ大地溝帯	米・コロラド/ニューメキシコ	0	0
17	カリフォルニアの山岳マッピング	米・カリフォルニア	0	0
18	ノバスコシアの哺乳類	カナダ	0	10
19	北極圏周辺の気候変動	カナダ/マニトバ	2	10
20	コククジラの回遊	カナダ	3	15
21	コスタリカのウミガメ	コスタリカ	0	6
22	中央アメリカの火山	コスタリカ	0	1

2-2 海外のプロジェクト

NO	プロジェクト名	エリア	日本の参加人数	累計
23	コスタリカのコーヒー農園	コスタリカ	0	0
24	森のイモムシ	コスタリカ	0	0
25	バハマのサンゴ礁調査	バハマ	0	4
26	バハマの沿岸生態系	バハマ	0	0
27	バハマのマングローブとサンゴ礁	バハマ	0	0
28	ベリーズのサメ	ベリーズ	0	0
29	ベリーズのサンゴ礁生態系の復元	ベリーズ	1	1
30	トリニダードのオサガメ	トリニダード	0	1
31	プエルトリコの雨林	プエルトリコ	0	2
32	森のイモムシ	エクアドル	1	1
33	気候変動・樹冠・野生生物の関係	エクアドル	0	0
34	エクアドルの森林と野生生物	エクアドル	1	1
35	ブラジルの野生動物とその回廊 (旧:ブラジルのジャガー)	ブラジル	1	2
36	ブラジルの雨林と気候変動	ブラジル	0	0
37	アマゾン川の川船	ペルー	0	0
38	イースター島の文化遺産	チリ	0	0
39	ワイサムの森の気候変動	イギリス	0	0
40	ヘブリディーズ諸島のクジラとイルカ	イギリス	4	8
41	タイン川のローマ時代の城塞	イングランド	—	—
42	タイン川のローマ時代の城塞(舞台裏)	イングランド	—	—
43	英国でのローマ遺跡発掘	イングランド	0	2
44	英国でのローマ遺跡発掘(週末短期)	イングランド	0	0
45	モーレイ湾のクジラとイルカ	スコットランド	0	3
46	プロバンスの鳥と生物多様性	フランス	0	0

2-2 海外のプロジェクト

NO	プロジェクト名	エリア	日本の参加人数	累計
47	ボルドーのワインと野生生物	フランス	1	1
48	古代ローマ帝国時代の海岸都市の発掘	イタリア	1	1
49	ボヘミアの山水	チェコ	0	2
50	ギリシャのバンドウイルカ	ギリシャ	5	13
51	南アフリカのペンギン	南アフリカ	1	5
52	カラハリ砂漠のミーアキャット	南アフリカ	1	1
53	南アフリカの野生生物	南アフリカ	0	0
54	南アフリカのカッシュクハイエナ	南アフリカ	2	5
55	南アフリカの哺乳類の保全	南アフリカ	0	0
56	ケニア沿岸のマングローブ	ケニア	0	5
57	ツァボのゾウ	ケニア	0	1
58	ケニア、サンプルの野生動物と地域社会	ケニア	0	1
59	ケニアのクロサイ	ケニア	1	10
60	ケニア沿岸のマングローブ	ケニア	0	5
61	ナミビアでのチーターの保護	ナミビア	0	2
62	マダガスカル肉食動物	マダガスカル	0	2
63	セーシェル諸島のサンゴ礁とマングローブ	セーシェル共和国	0	0
64	オーストラリアの消え行くカエル	オーストラリア	1	1
65	雨林の気候変動	オーストラリア	0	0
66	マンタの海	オーストラリア	4	4
67	シドニーの未発見哺乳類	オーストラリア	0	0
68	危機にあるカメ	オーストラリア	1	1
69	キンバリーの淡水ガメ	オーストラリア	0	0

2-3 イベントの開催

2-3) イベントの開催

月日	イベント	概要
2010年10月23日～29日	COP10	生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)が名古屋で開催されました。その生物多様性交流フェアにアースウォッチもブースを出展し、ブースには延べ1500人が訪れました。
2010年11月6日	体験報告会 「未来に残す海の奇跡～世界の研究者と同じフィールドで～」	アースウォッチは2006年度より日本郵船株式会社と協働で、「日本郵船ネイチャーフェローシップ」を開催しており、第5期生が無事プロジェクトを終了して帰国しました。帰国した大学生、日本郵船グループ社員の皆様による体験報告会を開催しました。
2010年12月9日	エコプロダクツ	エコプロダクツは日本最大級の環境展示会です。アースウォッチもブースを出し、多くの方に活動を紹介しました。
2010年12月18日	第二回 アースウォッチの集い	アースウォッチの会員や支援者の皆様からの「気軽に参加できる集まりを開いてほしい」、「ヨコの関係でお互いに知り合える場がほしい」、というご要望にお応えして開催し70人もの人が交流しました。
2011年1月26日	ミニトーク 「ブラジルのジャガー」	草原に棲むジャガーを保護するために、天然の回廊として利用されているアラグアイ川などの生態調査についての体験報告会を開催しました。
2011年3月3日	ミニトーク 「北極圏周辺の気候変動」	北極圏の永久凍土に閉じ込められている膨大な温室化効果ガスと、地球温暖化による生態系への影響のモニタリング調査についての体験報告会を開催しました。
2011年5月20日	ミニトーク 「ボルネオの雨林と気候変動」	生物多様性の宝庫ボルネオ島。気候変動がその熱帯雨林に与える影響を評価し、今後の森林回復計画に役立てる調査についての体験報告会を開催しました。
2011年6月24日	ミニトーク 「モンゴルの大草原の野生生物」	大草原に生息する世界最大のオオツノヒツジ“アルガリ”。その絶滅を食い止めるための生態調査の体験報告会を開催しました。
2011年7月23日	キックオフイベント	共感助成プロジェクトのキックオフイベント。震災復興支援プロジェクトを立ち上げに際し必要な資金を、「共感助成プロジェクト」(公益社団法人信託資本財団)を通じて寄付を募りました。

2-3 イベントの開催

月日	イベント	概要
2011年7月23日	ミニトーク 「オーストラリアの消えゆくカエル」	オーストラリア東部の雨林に生息する絶滅の危機に瀕する多種のカエル。その原因を探る生態調査の体験報告会を開催しました。
2011年8月19日	アースウォッチ中部の会	COP10の開催により会員の広がりが見られる名古屋において、初のイベントが開催され、会員以外の方にも多数ご参加いただき、盛会となりました。終了後の交流会も大いに盛り上がりました。
2011年8月31日	ミニトーク 「バーネガット湾のキスイガメ」	アメリカ東部の塩性湿地バーネガット湾に生息するキスイガメの生態調査に参加したボランティアが体験談を発表しました。



2-4 企業との協働事業

2-4) 企業との協働事業

アースウォッチ・ジャパンでは、企業の社会貢献、環境、CSRの部署と協働して、以下の事業を実施しています。

Research : 野外調査プロジェクトの助成事業

アースウォッチの国内プロジェクトの立ち上げ・運営に対し、企業の資金的なご支援をいただく事業です。

主な実績(敬称略 順不同)

香港上海銀行	: 温暖化と沿岸生態系プロジェクト 東京湾のアマモプロジェクト
三菱商事株式会社	: 沖縄のサンゴ礁プロジェクト
ライオン株式会社	: 山梨ライオンの森多様性調査プロジェクト
花王株式会社	: 富士山周辺の絶滅危惧チョウ類

Engagement : 社員の派遣事業

アースウォッチが国内外で運営する野外調査プロジェクトに企業の従業員が参加する事業です。これまで12社の企業が参画され、社会貢献や社員教育などのメニューとしてアースウォッチのプロジェクトを活用していただいております。

2010年度社員派遣を実施された企業(敬称略 五十音順)

花王株式会社 / 株式会社資生堂 / 新日本有限責任監査法人 / 大正製薬株式会社
株式会社ニコン / 日本郵船株式会社 / 株式会社日立製作所 / 香港上海銀行
三井住友海上火災保険株式会社 / 三菱鉛筆株式会社 / 三菱商事株式会社
ライオン株式会社

Fellowship : フェロウシップ(奨学金制度)事業

意欲ある大学生や小中学校教員などを広く一般から募集のうえ選抜し、企業の資金援助によって国内外のプロジェクトに派遣する事業です。

企業の取り組み実績(敬称略 順不同)

花王株式会社	花王・教員フェロウシップ生物多様性支援プログラム
日本郵船株式会社	日本郵船ネイチャーフェロウシップ海洋調査体験プログラム

3. 事業報告と会計報告

3. 事業報告と会計報告

2010年10月1日～2011年9月30日に実施した活動を事業別に記載したものです。次ページの会計報告と併せてご覧ください。

事業名	内容	実施日時	実施場所	従事者の人数	受益対象者の範囲及び人数	支出額(千円)
野外調査研究 支援事業	国内外で行われる野外調査研究活動の支援およびボランティアの派遣。				本法人の趣旨に賛同する一般市民	14,892
	・ 海外調査研究支援	通年	全世界	3人	46人	
	・ 国内調査研究支援	通年	全国	3人	173人	
情報収集・ 提供事業	野外調査研究の成果などに関する情報の収集と提供。				本法人の趣旨に賛同する一般市民	348
	・ 国内調査開催案内、パンフ等の配布	15回	全国	20人	7,500人	
	・ 英語版ガイド	1月	全国	5人	1,000人	
	・ HPアップデート	年8回	全国	40人	30,000人	
	・ メルマガ配信	年11回	全国	1人	27,714人	
研究会・ セミナー事業	研究者による研究成果の報告会、各種セミナーの開催等。				本法人の趣旨に賛同する一般市民	526
	・ COP10名古屋出展	10月	名古屋			
	・ 研究者セミナー	12月	東京	10人	77人	
普及・啓発事業	支援する調査研究活動の促進とボランティア活動への参加の促進。				本法人の趣旨に賛同する一般市民	1,968
	・ 月例ミニトーク集会	年10回	東京	20人	300人	
	・ エコプロダクツ	12月	東京	20人	150人	
	・ 環境GEOC見本市	7月	東京	3人	100人	
	・ EWの集い	12月	東京	15人	77人	
	・ EW中部の会	8月	名古屋	3人	15人	

3. 事業報告と会計報告

平成22年度特定非営利活動に係わる会計収支計算書

平成22年10月1日から平成23年9月30日まで

(単位:円)

科 目	金 額	
収入の部		
1 会費・入会金収入		
個人入会金・会費収入	1,043,500	
法人会費収入	2,500,000	3,543,500
2 事業収入		
海外調査研究活動	7,388,205	
国内調査研究活動	18,590,844	25,979,049
3 寄付金収入		3,376,396
4 補助金等収入		
民間助成金収入	3,200,000	3,200,000
5 雑収入		
預金利息・雑収入	332,325	332,325
当期収入合計 (A)		36,431,270
支出の部		
1 事業費		
(1) 野外調査研究支援事業		
海外調査研究	8,634,947	
国内調査研究	6,257,273	
(2) 情報収集・提供事業	348,350	
(3) 研究会・セミナー事業	526,373	
(4) 普及・啓蒙事業	1,968,479	17,735,422
2 管理費		
人件費	8,701,961	
通信・運搬費	583,060	
旅費交通費	469,209	
事務用品・消耗品費	368,935	
賃借料・光熱費	2,797,630	
雑費	196,209	13,117,004
当期支出合計 (B)		30,852,426
当期支出差額 (A) - (B)		5,578,844
前年度繰越金 (C)		22,279,300
次期繰越収支差額 (A) - (B) + (C)		27,858,144

3. 事業報告と会計報告

書式10号(規則第11条関係)

平成22年度特定非営利活動に係わる会計財産目録

平成23年9月30日現在

特定非営利活動法人アースウォッチ・ジャパン

科目	金額 (単位:円)	
資産の部		
1 流動資産		
現金	46,927	
郵便振替	1,193,800	
普通預金	21,315,848	
普通預金	1,561,615	
流動資産合計		24,118,190
2 固定資産		
土地建物	0	
車両	0	
敷金	1,138,800	
固定資産合計		1,138,800
3 未入金		
未収入金	8,135,249	
前払金	0	
未入金・前払金合計		8,135,249
資産合計		33,392,239
負債の部		
1 流動負債		
短期借入金	0	
預り金	566,759	
流動負債合計		566,759
2 固定負債		
長期借入金	0	
固定負債合計		0
3 未払金		
未払金合計	4,967,336	
負債合計		5,534,095
正味財産		27,858,144

4. アースウォッチ・ジャパン 中長期計画の策定

4. アースウォッチ中長期計画の策定

このたび、アースウォッチ・ジャパンの中長期計画を策定致しましたので、皆様にご報告致します。

本計画は、アースウォッチ・ジャパン一般会員・元会員へのアンケート調査や関係機関の皆様よりご意見を伺い、ニーズや課題を分析し策定したものです。

会員に対するアンケート調査
・対象：一般会員196人・元会員654人
・回収：会員 86人(回収率43.9%)
元会員124人(回収率19%)

本計画を策定するにあたり、ご協力いただきました皆さまに、この場をお借りし感謝と御礼を申し上げます。

なお、本計画はPanasonic サポートファンド「NPO基盤強化助成」によるご支援を受けて実施しましたことをご報告致します。

～ 中長期計画の策定 ～

短期：認知度向上期

(～2013年9月末)

- ・アースウォッチの認知度を向上
- ・既存会員との関係強化
- ・運営基盤の確立

中期：ブランド構築段階

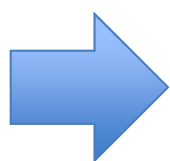
(～2017年9月末)

- ・国内プロジェクトや関係者へのサービスを拡充
- ・幅広いステークホルダーとの関係を構築

長期：成果創出フェーズ

(～2020年9月末)

- ・より多くのステークホルダーを巻き込むプロジェクトやサービス、運営体制を構築



- ・計画期間は、COP10にて採択された愛知ターゲットと同じ10年間とした。
- ・まず短期計画目標を実現するためのアクションプラン51項目を設定し、定期的にフォローアップを行いつつ、実行中。

5. ご支援について

5. ご支援について

アースウォッチ・ジャパンの活動は、多くの個人・法人会員の皆様によって支えられています。

アースウォッチが国内で、世界各地で行っている活動をさらに進めていくためには、皆様からのご支援が欠かせません。ご入会いただくことで、あなた自らが世界各地の野生生物や生態系保全調査プロジェクトに参加し、自分の力で貢献できます。

またお支払いただいた会費によってアースウォッチの活動自体を支え、フィールドリサーチをサポートすることができます。

会員制度

会員区分	入会金	年会費	有効期限
個人会員(大人)	5,000円	5,000円	年会費： 入金日より1年間。 入会金： 無期限。一度ご入会いただくと、非会員の時期があっても、再度入会金をいただくことはありません。年会費の入金だけで会員資格を取得できます。
個人会員(学生)		5,000円	
個人スポンサー会員	なし	一口5万円以上(何口でも可)	
家族会員 (会員のご家族の入会)	免除	5,000円(大人) 3,000円(学生)	

会員区分	年会費	有効期限
法人会員(1)	一口50万円以上(何口でも可)	年会費： 入金日より1年間。 法人会員の入会金は ありません。
法人会員(2)	一口10万円以上(何口でも可)	

ご支援いただいている企業(法人会員企業 敬称略 五十音順) 2012年3月現在

花王株式会社 / 株式会社資生堂 / 新日本有限責任監査法人
 大正製薬株式会社 / 株式会社ニコン / 日揮株式会社 / 日本郵船株式会社
 BNPパリバ証券株式会社 / 株式会社日立製作所 / 香港上海銀行
 三井住友海上火災保険株式会社 / 三菱鉛筆株式会社 / 三菱商事株式会社
 ライオン株式会社

アースウォッチ・ジャパン 理事・監事

理事長	都留 信也	元日本大学農獣医学部・国際地域研究所 教授 元横浜国立大学環境科学研究センター 教授
副理事長	宮原 耕治	日本郵船株式会社 代表取締役会長
理事	田尾 陽一	セコム株式会社 顧問
理事	石田 秀輝	東北大学大学院環境科学研究科 教授
理事	永井 正幸	東京都市大学工学部環境エネルギー工学科 教授
理事	熊野 英介	アマタホールディングス株式会社代表取締役会長兼社長
理事	小林 俊介	前アースウォッチ・ジャパン事務局長
理事	安田 重雄	アースウォッチ・ジャパン事務局長
監事	西 準一	西準一税理士事務所 所長